

---

# お約束days

日高遊苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お約束days

### 【Nコード】

N9531E

### 【作者名】

日高遊苑

### 【あらすじ】

連載中（不定期更新です） まあまあ面白可笑しく過ごしてきた、青春時代真っ只中の俺の前に現れたのは、この町じゃあ有名な『お約束ガール』こと日向あかり。常時かけている眼鏡を外すと美少女顔になり、朝遅刻する時は食パンをくわえながら走って登校してくる変な女。そんなアカリと、俺・ソラは、なんだか妙な付き合いをしていくことになり…？

## ブローグ

俺は、こはやかわ小早川高校に通う極普通の男子生徒だ。

名前だって、いちばらそら市原空というありきたりな姓名だ。

高2という青春時代真っ只中の男だ。

正直、運動神経にはかなりの自身がある。いざという時に女を守るくらいの力はある。

顔と言えば、普通に告白されたりする。だからと言って人気者なわけでもないが。

成績は必要最低限のラインを越えているから、まあ安心だろう。

経済的な話では、そこいらの学生の間で有名だ。なんだって、家が屋上プール付きなのだから。

たまに、それが目当てで大人数で押しかけてくるヤツらがいるけれど、出来る限り寛大な心で迎え入れてやる。

俺の苦手なものと言えば、何よりも授業。

とりあえず出てはいるが、内容を頭に収めてはいるが、とにかく面倒だし気に入くない。

特に音楽の担当、小池は口うるさい。俺を完全に敵視している。

偉そうな口振りをしているが、俺は世間から見ると『ワル』ってやつに属するんだろう。

こんな下らない自己アピールは終わりとして、今の俺の近況を話すと、これまた長くなってしまう。

とりあえず、今俺の目の前で俺に微笑みかけている女子高生……日向あかり、

この女との始まりから語ることにしよう。

## ブローグ（後書き）

アドバイス等ありましたらコメントお願いします。

## 昇降口での衝突事故（出会い）

まず、時は3日前の放課後に遡る。さかのぼ

俺はいつものように早足で教室を後にした。

一見チャラチャラした雰囲気かもを醸し出しているように見えるが、決してそんなキャラではない。

秀才でもなければ、バカでもない。ただ自由気ままに過ごしてきた。

だから、周りに迷惑と不快感だけ掛けてる下らない連中とは滅多なことじゃあ連つるまない。

早く家に帰って昼寝して、晩飯喰って寝よう……

そんな単調な生活を繰り返すだけの日々を送っていた。

単調な繰り返し、それこそが俺には安心感があって、居心地が良かった。

だから、それを変えようとなんて考えたことはないし、変えたくないが為に部活はせず、彼女も作らない。バイトも興味がない。

俺は今まで、そしてこれからもずっとこの調子で過ごしている。

そんな矢先に起きた出来事は……まさに、その調子を狂わす、俺にとっての悲劇的大事件となったのだった。

「きゃっ！」

俺が靴を履いて昇降口を出た……丁度、なんて絶妙なタイミングなんだろうと感嘆してしまいそうなくらいタイミング良く、俺よりかなり背の低い女子が俺の胸板にぶつかって来た。

「つてえ……、てめえ突っ走ってくんじゃ」「いたたあ……。ふ、ふえ！？め、眼鏡が……」

俺の文句も言い終わらないうちに、その女子生徒は俯いたままたじろぎ始めた。

そいつは掛けていたらしい眼鏡を探していた。その眼鏡はというと、物の見事に2メートルほど遠くに吹っ飛んでいた。

『なんなんだこいつ、昔のマンガのヒロインかよ』

そんな光景に吹き出しそうになるのを堪えながら、仕方なく眼鏡を拾って渡してやる。「ほら」

そいつは、俺の正体が見えないからだろうが、慌てふためきながら「あ、ありがとうございます」と言っ受けた。

顔をあげたそいつを見て、目を丸くしてしまった。

『…なんだこいつ』

咄嗟とっさに思ったのはその一言だった。

あまりに衝撃的すぎて、身に付いている筈の語力が皆無になってしまった。

そいつは俺の思考を一時シャットアウトさせた。

……要するに、滅多に惚れない体質の俺から見てもとても可愛い顔をしていたのだった。

なんとなく見覚えのあるような、そうでもないような感じのそいつは、「ふあゝ、見える見えるっ」

…多少なり危ない顔をしながらそう言っつて、俺の方を向き直った。

「ありがとうございます。えっと…、同じクラスの市原君、ですよね？」

なんだ、こいつ俺のクラスか。…そんな程度の記憶すらない。

ちなみに言うと、俺は人の名前やら顔を覚えるのは大の苦手だ。

だから別段興味なさ気に「おお。俺はお前を知らないけどな。じゃあ」と片手を上げ、別れの意を示した。

俺はこの出来事を穩便に終わらせるべく、長話はしないで早く帰ろうと思った。

だがそうはいかないのが今回の事件だった。



「あの！一緒に帰りませんか？ていうか、帰りましょう！私、急いで忘れ物取って来ますから！」

なんとそいつは、そう言うなり校舎内に向かって駆けだしていったのだった。

啞然とした俺はその場から動けず、そいつを待つ形になってしまった。

「すみませんでした！じゃあ、行きましょう！」そして30秒足らずで戻って来、走りながらそう叫んだ。

周りからの視線が俺たちに集まる。

俺は多少たじろいだが、そいつは半ば強引に俺の手を引っ張って校門に突き進んでいった。

ちよつと待て。なんで俺は見ず知らず（？）の女と手を繋いで歩いてるんだ。

門を出た辺りで、俺はやつとのこと口を開いた。

「あのさ……俺、一緒に帰るの良いつて言っていないんだけど」

「あ、名前まだ言ってますでしたね。あたし、日向あかりっています」

誰も聞いてねえよ。ていうか質問に答えやがれ。

「一緒にクラスだけど…たぶん市原君、人の顔覚えてないですしね。はじめまして」

なんで、そんな個人的な事までよく知ってるんだよ。

心底そんな悪態をつきながら、渋々俺も名乗りをあげた。

「市原空。よろしく」よろしくしたくないのが本音だが。

「んで。俺OKしてないんだけど、帰るの」

「市原君はなんでそんなに毎日急いで帰るんですか？」

いやいや、人の話聞けよ。

「別に。特にすることないし、寝てえし」

なんだかどうでも良くなってきたので、適当に話を受け流しながら一緒に帰ることにした。

あかりは、無愛想な俺の返答にも嬉しそうに笑ったりした。

自分の話をちゃんと聞いているのか聞いていないのかも分からない俺に、ちよつとした、本当にちよつとした愚痴を零しては同意を求めたりもした。

俺は意識を向けなくて答えていたものだから、内容はよく覚えてい

ない。

そんな感じで、あかりの一日目の奇襲は終わっていった。

……もう気づいただろうが、俺が何かと誘われるのは一回なんかじゃなかったのだ。

「市原君っ！」まずは翌日の朝のHR中。ホームルーム

なんと俺の後ろの席だったあかりは、俺の方を静かに叩いて「今日も一緒に帰りましょう！」と言ってきたのだった。

無論俺はイヤだと答えた。

これも予想がつくだろうが、勿論あかりは、そんな事聞こえていませんとでも主張するかのように見事にスルーし始めた。

そして、帰りを誘うだけなら良いとして。百歩譲って良いとして。

「市原君！一緒に教室移動行きましょう！」

なにが魂胆なのか、下校時以外にも頻繁に俺につきまとわり始めたのだった。

「……あのな、お前さ。一応お前女子なんだから。おトモダチと一緒にいた方が良いんじゃないかねえの？」

たまりかねた俺はそう言っただけだ。

けど、あかりは微笑みながら言うのだ。

「何言ってるんですか、市原君だってお友達じゃないですか」

……。

……イヤ、そういう意味じゃなくてだな。

「お前、もしかしてオトコ好き？」

からかいを含んだ言い方をしたのだったが、自分で言っていて何か違う事を言ったと思った。

あかりはまたしても微笑みながら「男の子も女の子もみんな好きですよ」と言った。

……ちがうぞ俺。こいつはオトコ好きとか、そういう問題じゃない。

「お前さ……」

俺は、頭にクエスチョンマークを浮かべっぱなしのあかりに溜息を

ついた。

……こいつ、完膚無きまでの天然女だ……

呆れた溜息が出たと同じ瞬間、あかりは俺に言った。

「じゃあ、行きましょうか！」

## 昇降口での衝突事故（出会い）（後書き）

アドバイス等ありましたらコメントお願いします。

### 3日目になつての異変

「お前、本物好きなんだな」

だんだんあかりの態度に慣れてきた俺は、3日目の下校前のHRで言つてやつた。

やっぱりあかりは「市原君は物じゃないでしょう?」と言つて微笑んだ。

『いや、そういう意味での答えが欲しいんじゃないけど……』

こんな感じの会話しかないが、なんだか生活が充実している気がする。

俺つて前まで相当寂しい奴だったんじゃないか？

そんな疑問すら抱けてくる。むしろ以前の俺に泣けてくる。

「……………以上でHR終わるぞー。じゃあ、ちゃんと掃除して帰れよ！」

担任教師が教室から出て行くと、掃除や下校のために生徒が立ち上がった。

言つまでもなく俺も立ち上がり扉へ進む。

「あつ、待つて！」

女声に呼び止められ肩に触れたので、俺はあかりなのだと思つて振り返つた。

……ちなみに、以前の俺は女子との会話を拒んでいたから普通はシカトしていた……

だがそこに居たのは、正直苦手な<sup>ながさきあやね</sup>長崎文音とその仲間二人だった。

『やべえ、目え合っちゃった』

女子嫌いな俺は、化粧が濃く香水の香りのきついそいつらとは関わりたいくないので、そのままスルーして出て行こうとした。

この学校のそういう種族の女子たちと関わるとロクな事がないと、周りの男子を見て学んだ。

扉をくぐろうとしたが、文音はずかさず俺の肩を強く掴んだ。

「待つてよ空。話あるんだけど」

「俺はないんだけど。昼寝しなきゃいけないから離して？ ついでに、軽々しく名前で呼ばないで」

いつものように冷たく言い放った。しかし、文音たちは「キャー！」と叫んで頬を染めたようだった。

『う…うぜえ……』

自分で言うのも憚<sup>はばかり</sup>れるが、俺は何気に女子に好かれてる方だと思う。



いや、ナルシストとか言う話じゃなくて。真面目に。

年上の友達に、合コンの女呼び込みに使われたりするし。

でも、そんな中には勿論俺の好みの女はいない。

俺が好きなのはこう……純情で、ふわふわしたオーラを放つ可愛い子であって。

正直、俺は冷徹な言葉しか口に出さないからそんな子とは釣り合わないと思うが。

しかし決してこんな、いかにもな雰囲気的女子ではなくて。

…ていうか、お前ら顔近いんですけど。

女子の一人・椎橋柚木しいはしゆずきが俺に向かってまじまじと言った。

「空ってさー、最近あかりと仲良いよねー」

あかりは確か、文音たちと正反対の子たちのグループだったと思う。

ということは今から言われるのは、あいつに対しての皮肉か嫌味か何かなんだろう。

悪趣味だな、と呆れた眼差しで一瞥した。

ていうか、別段俺はあかりと仲良くしているつもりはないんだが。

「お前らには関係ねえし」

「つれないなあっ、付き合ってるんじゃないの？」

柚木は、男子の間で人気な、自慢の大きな目をニヤつかせながら言  
った。

もう一人の女子・小野寺早紀おのでらき乃は「えゝ！？んなワケないでしょっ  
！釣り合わないって、顔的に！！」と高笑いした。

「やつぱゝ？しかもあいつ、今時あの眼鏡はないよねえ！」

「そうそう。ていうかチビだし頭の中もお子サマだし。みんなに敬  
語使うとか、どこのマンガのキャラだったっの！」

「やめてその話題出さないで！思い出すだけで笑えてくるから！」

しばらくそんな会話が続いたが、俺は段々腹が立つてきた。

耐えられなくなった俺は、行く手を阻んでいた早紀乃を軽く突き飛  
ばして早歩きで出て行った。

「痛いたあー！ちよっ、空！」

後ろから戸惑い混じりの怒声が聞こえ、すれ違ふ奴らに盗み見され、  
睨み付けながら結果的には大人しく引いてやったのだった。

なんなんだ、あいつらは。

わざわざ俺のところに来て、あいつあかりの悪口だけ馬鹿デカい声で言いふらしやがって。

あいつ何もしてねえじゃねえか。

帰路についた俺は、そんな事を考えながら怒りで胸がいっぱいだっ  
た。

『…あいつだつて』

文音たちとあかりの顔を思い浮かべ比較する。

文音たちの女子高生とは思えぬ化粧の濃さに吐き気がする。

俺的には、文音たちよりあかりの方がシンプルで好きだ。

…いや、変な意味の‘好き’じゃなく。

『確かに敬語キャラは珍種だけど、性格は良いヤツだし、眼鏡取っ  
たら…』

…待て、俺。何考えてるんだ？その思考は停止しろ。

なんで一人で帰る時くらい自由な考え事をしないんだ。

俺は一人で頭を押さえながら歩いた。

周りから見たら相当危険な高校生だったことだろう。

そんな俺に、優しい声が降りかかった。

「市原君。何で頭抱えてるんですか？」

俺は、聞き覚えた声に、<sup>あ</sup>敢えて振り向かない。

振り向きたくなかったからじゃない。顔を見たくなかったんじゃない。  
い。

きつと、顔を見られなくなかったんだと思う。

日向あかり。

俺はいつもこいつに頭をやられてしまったらしい。

### 3日目になつての異変（後書き）

おそらく、お約束の出現はこれからになると思います。  
アドバイス等ありましたらコメントをお願いします。ハ・ハノ

## 俺的ハプニング

「市原君、何も言わずに出て行っちゃうなんて、無愛想だって噂は本当だったんですね」

そんな台詞を言いながら、あかりは俺に向かって明るい笑顔を見ている。

やりわりしたその表情は、きっと誰もの心を緩められる力があるんだろう。

俺は思わず肩の力を抜いた。

「無愛想って…余計な世話だけだな」

居たたまれなくなったので顔を背けて言い捨て、そのまま歩き出す。

あかりは「あ、待ってください！」と追いかけて来る。

背後にほんわかとした気配を感じる。

足取りが余程軽いのか、あかりの足音はあまり聞こえない。

しかし確実に俺に追いつこうと早足で歩いている。

そんなあかりの姿を想像していると、何故か笑みがこぼれた。

「市原君？笑ってるんですか？」

俺が笑ったのが意外だったらしく、いつもよりやや高めの声音であかりは尋ねてくる。

「なんでもねえよ」

「なんでもなくないです。笑ってるところ！は、初めて見ました！」

「うるさいお前。別に笑ってないよ」

「笑ってます笑ってますっ！」

「笑ってないって言ってるじゃん」

「嘘ばかり〜。しっかり笑ってますって」

会話とまではいかないやりとりを繰り返し、繰り返し。

俺は多分この2、3日で、この雰囲気慣れてきたんだろう、

あかりがついてくるのが当たり前前に感じる。

いつでも笑顔を絶やさないあかりは、何故か暖かく思えた。

「市原君は、笑ってる顔が可愛いんですね」

俺はピタリと止まる。隣を歩いていたあかりも立ち止まった。

『可愛らしいって……。俺に向ける言葉かよ、それ』

俺はもはや、笑みを隠そうとはしなかった。

「え…っ。やっぱり、男の子は可愛いって言われるのは傷つくものですかっ!？」

け、軽率ですみません!」

笑むどころか最終的に吹き出す始末だった。

『久々だな、笑ったの』

別に大して面白い訳ではなかったが、あかりの戸惑い具合に笑った。

特に何もなかった日々。変に付きまとう奴が現れたこの頃。

日向あかり。こいつが、俺の生活を変えた…のかも知れない。

「市原君、あの!」

さっきの表情のまま「んあ?」と情けない返事をする。

あかりは俺の前に歩み寄って来て、手をヒラヒラさせて俺を近づけさせた。

なんだか必死な顔色だ。

なんなんだ、と思いながら呼ばれるがままに近づく。



と、その瞬間。

ちゅっ、という極ありきたりな効果音を出し、俺の唇に何かが触れた。

気のせいなのだろうか、それとも事実そんなことが起こったのか定かではないが、

俺は確かに今、間近にこの目で見た。

現在ただ呆けている俺の目には、あかりの仄めかしいピンクの唇が映り、

そしてその他にも、子供がよく持つマシユマロのような頬、艶やかで日本人女性を思わせる黒髪、

そしてなにより眼鏡越しの長い睫毛。

化粧なんて全く必要としないその美貌は、知った日には大勢の男共が押し付けてくることだろう。

……そんなこんなで俺の頭の中はイカれてしまい、何が起こっているのかは察しの通りだが、もう俺は周りの住民や生徒のことなんて考えられなくなってしまった。

誰かが居たのか居なかったのかも分からない。

口元が熱いような気がする。

『……こいつ……三つ編み結ってたんだ……』

場違いな考え事だが、さすが本場の眼鏡っ子だと感心してしまうほどだ。

言うまでもなくセーラー服着用のあかりは、80年代スターを思わせる。

そんな感じで俺の思考はだんだん変な方向へ逸れていき……

たまたま落ちていった視線はというと、あかりの足下を捉えたのだった。

ローファアを履いたあかりは、俺の身長に少しでも近づこうと一生

懸命つま先立ちをしていた。

よくよく考えれば分かることだったのだが、俺とあかりの身長差は、少なくとも見積もっても30センチはある。

身長が大きいことで有名の俺と、チビで華奢だと有名なあかり。

俺が下に引つ張られていることを含めていても、相当な無理をしているに違いない。

『つま先立ちでキスって……お子様って言われるのは無理ないかな……』

そこまで考えが及び、やっとのことで俺は我に返った。

『きつ…………キス…………?』

え。なんで。なんで俺下に引つ張られてんの？

なんでこいつこんなに至近距離に居るわけ？

「……………。ちよつと待て」

さすがに内心驚きを隠せない俺は焦った。

あかりは未だ恍惚<sup>ムウツ</sup>とした顔で顔を赤く染めている。

「…………ふわあゝ、馬鹿にはしないで欲しいんですけど、私今のファーストキスだったんですよ」

状況把握も困難になりつつある俺は「はあ……」と、上司の愚痴でも聞いている部下のような態度になる。

…そう言えば俺も彼女なんて作らなかったから、これはファーストキスになる。

愛すぎてたまらない女なら彼女にしようとするし、彼女でもない女とキスするほど俺は薄っぺらじゃない。

それでも一応紳士のつもりでいるのが俺・市原空という人間だ。

俺はあかりに尋ねてみた。

「今のキスって……なんで、唐突に」

少し間を置いた後に、あかりは少し照れたようにはにかんでみせた。

「ファーストキスは苺味とか言いますが、私はシトラスみたいな

スッキリした感じでしたよ！」

……誰も「ファーストキスのお味は？」なんて質問してねえよ！！

## ツンデレラへの道1

そして俺は我に返ったのは良いものの、あかり曰くシトラス味のフ  
アーストキッスとやらの所為で、暫くは身動きをとるのもままなら  
ないのだった。

「市原君？市原君？」

あかりが呼んでいる気がするが、なんだかどうでも良いような感じ  
だ。

俺は呆然としながら歩き出し、先ほどのあかりの顔を思い浮かべな  
がら一人で帰って行った。

あかりは必死で俺を追いかけてきていたようだが、途中で小さな悲  
鳴が聞こえ、それと共に他の女子の声が聞こえてきた。

“きゃっ！”

“あかりっ、大丈夫！？”

“い…いたたあ……”

お尻打ちましたあ……”

“あんた大丈夫？今日はなんでコケたの？”

“え…つとですね……”

しばらく間が空く。

後ろの空間で苦笑いが聞こえた。

“これでコケましたワケです……”

まあ俺は見ずとも分かっていたのだが。

言わずもがな、あかりはバナナの皮で見事な滑りを繰り広げていたのであった。

俺がさり気なくその瞬間を見てみたかったというのは、とりあえず口に出さないでおく。

ついでに言つと、“なんでここにバナナの皮が落ちてるんだよ！”というツッコミも。

翌日。

この日からのあかりの行動で、俺は喜怒哀楽な表情を最大限に活かさざるを得なくなっていた。

まず、登校中の俺の耳に、ある噂<sup>うわさ</sup>が届いた。

「ソラ！はよ！」

歩いている俺を少し追い越して挨拶してきたのは、さばさばしていて俺が好んでる仲間・おきたきようすけ沖田京祐だ。

「っはよ、京ちゃん」

‘京ちゃん’というのは、京祐の腹違いの妹が“京ちゃん”大しゅき”と呼びながらしょっちゅう抱きついているからそれをマネているのだ。

京祐の家庭の事情は結構なドロドロさだが、義理の妹の態度にはまんざらでもないらしい本人。ロリコンか。

まあ、京祐が妹（本名：おきたきゆういか沖田由依夏）を“ゆっちゃん”と語尾にハートマークを付けて呼び、その上おデコやらホッペにチューしまくっているという事実には敢えて触れないでおこう。

とまあ、その京ちゃんだが、なんだかにやにやしながら俺を物色してくるので、

「なんだよ京ちゃん。俺がそんなに可笑しい？」

「いつやあ、別にい？」あからさますぎて返って笑える。

「なんだよ、言えよ」俺が焦れたそうに言うと、京は尚のことニヤついた。



「ソラ、お前、日向と一緒に毎日帰ってるんだよね？」

やっぱり噂されるのか、と半ば呆れながら溜息混じりに「そうだけど」と言う。

「それが。何かあんのかよ」

京はすかさず答える。

「ソラ知らない？日向の噂ってか、二つ名」

俺は思わず吹き出しそうになった。「二つ名ア？なんだそのファンタジックなヤツ」

思いの外京は真面目に言っていたらしく、ふてくされたような顔で続ける。

「なんだよ、だってみんな言ってるぜ？」

“日向あかりは、まさにそんな感じだな” って

「だから、何なんだよ」

いい加減もったいぶりすぎだ。

「あいつな、日向。すっごい【お約束】ぶりだろ？」

だからみんなから【お約束ガール・日向あかり】って呼ばれてやがんの」

ああ、なるほど。

まあ、そんな印象だった。

地面に突如バナナの皮が出現したことで確信していた。

たぶんあれは天然少女なんかじゃあない。ありきたり、ありきたり。

ありきたりを通り越してもはや「お約束」なわけだ。

マンガのヒロインにしばしば使われる、あのキャラだ。

……古い！というツツコミは考えないものとする。

「まあちなみに言うとな、お前はそれのお約束ガールのボーイフレンドっちゅうわけだ」

「なんでそうなる！」

俺が勢いよく振り返ったので、京は驚いて後退した。

そして、その瞬間に足を踏み外した。

まるでマトリックスの撮影現場であるかのようなその舞いっぷりに見とれてしまったが、

…まあ、それどころではなからう。

「うわぁっ！」

急いで腕を引っ張ろうと思ったが、あまりにも距離が遠すぎて間に合わなかった。

やばいと思ったのもつかの間、京の下には人影が現れた。

「ふぎやつ」

.....あかりだった。

「いったたたあ……。あ、危ない危ない！階段じゃふざけてちゃいけません、沖田君！」

頬を可愛らしく膨らませながらあかりは注意した。

そのあどけない顔つきは、まさか今の救世主があかり本人だとは到底思えない程のものだ。

気迫の無さにむしろ圧倒される。

たぶん、この光景をマンガやアニメにすると、彼女の鼻先には蒸気のマークが浮かんでいることだろう。

心なしか、怒っていて鼻息が荒い。

「まあ、まあ。ありがとうアカリちゃん。助かったよ」

「…えへへえ、どういたしまして」

恥ずかしそうに京に向かってはにかむあかり。

……いや、はにかむ前に。

俺は、この高さから落ちた京ちゃんを受け止めたのにダメージを感じないお前が怖いんだが？

優に10段はある階段だ。

京ちゃんは女子高生の注目を集めそうな感じの肉体美。

この女……あかり、一体どれだけの力があるんだか。

ふと、そんなあかりと視線が交わされる。

『おをおっ?!』

つと、逃げ出すまもなくお約束ガールとの一日が始まるのであった。

……いや、ここから俺の性根がイカれるなんて、思いもよらな  
かったんだが。

## ツンデレラへの道2

俺があかりと出逢ってから、まあ大体2週間ほど経った頃。

俺の中で、何か革命が起きつつあった。

「市原君〜!」

とまあこんな感じであかりが登場するわけで。

「おう」

俺もまあまあ今まで通りに反応をするわけだ。

「一緒に食堂行きましょうっ」

……百歩譲って、ここまでも一応いつも通りとする。

そして俺たちは1階の食堂に降り、あかりのお気に入りの席をとって、

俺は肉がたっぷりのスタミナA定食、あかりはサンドイッチを持ってくる。

この間にする会話は、前と比較すると著しく盛り上がりを見せていることだろう。

俺は受動的じゃなく、自分からもまあまあ話しかけるようになった。

あかりに興味を持ち始めたとかいう訳ではない、単に好みのものの話をされるとノってしまいうたちだったのだ。

だから少しは楽しく席に着き、俺は割り箸を割る。

あかりはmy箸とやらを持参し、テーブルの上に置く。

そして昼食が始まる。

最近になると俺たちを物色する者も減り始めていて、若干気楽になってきた。

周りは俺たちを気につけ、この席を空けておいていてくれる。

なんとまあ、良い心遣いなことだろう。

京祐曰く、俺目当ての後輩がいるとかで、その子らがキープしてくれているらしい。

…あかりの分もセットされているのは謎だが。

話を戻すでしょう。

問題はここからだった。

「市原君、あゝん」

………待て待て待て。

こここのところ俺の悩みを作っているのは、他でもないこの行為だ。

あかりが何のつもりでやっているのかは知れないが、とりあえず俺が困っているのは確かだ。

この声を聞いた時ばかりは周りの生徒たちも振り返る。

「始まった！」と言わんばかりの輝かしい瞳で俺たちを見つめてくる。

俺は…無論無視する。

「市原君っ、その定食じゃ野菜不足ですよ！私のレタスあげますから」

…という理由だそうだ。

あえてサンドイッチの日に箸を持参するのはこのためだ。

俺はやや動揺するが、まあそんな素振りは見せない。

「いいよ、お前喰いなよ」

あかりは引き下らない。

「駄目です、健全な男子高生がそんな栄養しか摂ってないなんて…」



食堂のおばさんが許しても私は認めません！食べなさい、市原君！」

俺はなんでこいつと飯を食いに来ているんだ。

口うるさいだけなのに、慣れだけではない何か足に足を引っ張られて来てしまっている。

多分、この間の事件のせいなんだろう。<sup>キス</sup>

俺はあかりの箸を避けながら、ぼうつとしつつ彼女の唇を見つめていた。

決して変態やらではないが、あかりの唇は形がいいと思う。

俺も一応は男なので、女に全くの無関心…という訳でも、興味が湧かない訳でもない。

昔は好きな子もちゃんとしたし、今は単純に気分にならないだけだ。

だから、「あれとキスしたのか」なんて思っていると、不意に

「ぶ」

俺の口にあかりのレタスが炸裂した。

正直このレタス、朝からドレッシングに浸ってたものだから萎え気味だ。

はつきり述べると、かなり不味い。

「……………」

やつのことで口に入っただのが嬉しかったらしくあかりは満面の笑みなので、俺は仕方なく不味いレタスを嚙んで飲み込む。

……俺は野菜が嫌いだ。

「…不味い」

ぼそつと聞こえない程度に呟いたつもりが丸聞こえだったらしい、あかりが野菜について語り始めた。

「野菜は本当に大切なんですよ！ビタミン源なんですから！

最近の高校生は好き嫌いが激しいですから、あんまり摂っていない人も多いですけど。

野菜を摂らないとまず体の調子が整いせんし、口内炎や肌荒れにもつながります。

私なんか毎日サラダ食べますよ、にんじんもピーマンも嫌いなのに！」

力説するあかりだが、好き嫌が多いのはこいつも一緒だ。

トマトやキュウリは食べられるものの、子供がよく残す人参、ピーマン、きのこ、ネギは大の苦手らしい。

きつと今はお手本になりたいとかいう一心なのだろう、俺は、あかりはヤセ我慢しているとみた。

「はいはい、分かったけど。お前もいいから食べよ、ただでさえ無駄に細いんだから」

あかりは標準体型よりやや細身だ。

女子たちから見たら「スレンダー」そのものなのだろうが、俺からみたら、もうちょっと肉付きがよくても良いくらいだ。

「わかりました、食べますよ」

そして最近反抗期なあかり。

俺に対して若干対抗したがる。

本来この年頃の女は大抵がそんなものなんだろうけど。

「でも、まずは市原君からという事で！あゝん」

……………やめて欲しい。

とどのつまり、俺の言いたいことは。

最近の俺は、あかりに流されっぱなしなのである。

同じ箸でモノを口に行っているのだから間接キスもしてるわけだし、それに対してさほど抵抗もしていない。

周りからしたら付き合っているようにも見えろだろうけれど、俺はそんなつもりはない。

でも、抵抗がないのだから、俺はあかりと付き合うこと自体に抵抗がないのかも知れない。

そういえば、最近の反抗するあかりを少しからかいたような気がしないでもない。

この間のキスも不快じゃなかった。

結論。

俺はあかりが、多少なりとも好きになりつつあるのかも知れない。

## シンデレラへの道2（後書き）

コメント・アドバイスおねがいします！

### ツンレデラへの道3

その日の俺は、具合が悪くなったので医務室で寝ていた。

具合が悪かったというより、気分が悪かった。

もっと言えば、だるかった、面倒くさかった。

……つまりサボりだった。

そんなサボりの俺に職員が言う。

「今授業ついていけるからって調子のるなよ。」

そのうち困ったことになっても知らないからな？

本気出し始めるなら今のうちだぞ」

「うるせーよ、ほっとけ」

不機嫌そうに返事をしてそのまま寝返りをうつ。

そいつは俺のことをまあまあ理解している担任・田村だったので、大人しく引き下がってくれた。

田村が出て行ったのを確認して安心すると、俺はほっと一息ついた。

医務室には俺一人。養護担当は今日、出張の日だ。

俺は『今日は一日中サボれるな』なんて考えながら深く眠りに落ちてゆく。

夢の中では、何かと幸せなことばかり起きていた。

親父はいつものように口にする教訓を全く言わないし、母親はやたらと構うこともない。

学校に行くとは何故か職員がいない。

生徒は好き勝手やっているけれど、俺が不快に思うことは何もしない。

いつもは排気ガス臭い教室も、今日は少しフローラルな香りがする。

そんな中俺は医務室に向かう。

医務室には、やはり養護担任はいない。俺は病人用のベッドに横たわる。

心地よい眠りにつく。

しばらくして、ノック音が聞こえる。

俺が反応する間もなく、人影が現れる。

その人影は微笑みながら、俺に徐々に近づく。

俺はその人物を知っているのか、スキだらけのままだ。

そんな無防備な俺に、そいつはだんだんと近づき、ベッドに座って俺を眺める。

俺は寝ぼけたままなのか知らないが、体が動かない。

そいつは俺の額を撫で、頬を触り、だんだん距離が近づく……………

そこで夢はぶつつりと途絶えた。

その代わりに俺に残ったのは、やたらリアルな夢の面影。

「……………」

しばらく声も出ない。

「……………?」

相手も微笑んだまま首を傾げる。

「……………」



……っ お前、近いっ！」

俺はやつとのこととて体を起こして飛び退く。

いや、飛び退くと言ってもベッドの上なので少し後退しただけだ。

だが後退したにも関わらず顔が近い。

「どうしました？熱あるんですか？」

………いい加減にして欲しいくらい、今日はあかりが妙に詰め寄ってくる。

「……お前、授業は？」

怪訝そうな顔をしながら、突如現れたあかりに俺は尋ねる。

「もう授業、終わりましたよ。今は放課後だから迎えに来ました」

ああ、そうか。俺はそのまま降りようとする。

足を床にのばす。

足が届かない。

降りたい。

降りたいんだが。

……降りれなかった。

あかりが邪魔をしているのである。

「…俺、帰るんだけど」

「熱あるんじゃないんですか？」

サボっているのを熱の所為だと思っているらしい、帰るのを許さないあかり。

いや、熱ないんだけど。てゆうか、具合悪くないんだけど。サボりですけど。

そう言いたいが、あかりが突然俺を押し倒して来た。

妙な誤解だけはしないでいただきたいので敢えて説明するが、変な意味ではなく、単に寝てろという意味らしい。

見下す形になり、やたらと大きいあかりの眼鏡は落下した。

顔に直撃したが俺は払いのけず、あかりと真っ正面に向き合う。

「いいですから、市原君は寝てなさいっ！」

あかりはベッドから降りると、ベッドのすぐ傍にイスを置いてそこに座った。

「……お前、帰らないの？」

「何言ってるんですか？市原君と一緒に帰るんですから、私は具合が良くなるまでここにいますよ」

そうにつこりしながら言っ、あかりは懐ふところからりんごを一つ取り出した。

『何故りんごが懐に！？』

その疑問は胸に秘めておこう。

俺は、りんごに続いて懐から出てくる折りたたみ式ペティナイフを眺めながら、本当に不思議な奴だなとしみじみ思う。

「ほら、りんご剥けましたよ」

別に病人なわけではないのにウサギリンゴが剥かれている。

なんだか複雑な心境だが、ありがたく頂く。

あかりが剥いたウサギリンゴは形がきれいだった。

切り慣れていたようだったし、きっとこついう事は器用なんだろう。

俺はその可愛らしいウサギを一口で食べる。

「お前さ、俺なんかと連んで、誰にも何も言われないわけ？」

「何かって言えば…例えば？」

「例えば、ほら…馬鹿が移るとか」

冗談で言っただつもりだったが、大真面目に受け取ってしまったあかりは真剣に考え始めた。

「市原君は馬鹿じゃないですよ。良いところだって沢山ありますよ。例えば…」

そんなあかりを見ながら苦笑いする俺。

悩ましいその表情を見ると、心なしか胸が痛い。

なんだか、惨めな俺。

「変に騒がないでクールにしてるのは魅力だと思いますし」

やつのことで捻りだしたらしいその一言は、実に間が長かった。

「へえ………」

「それに、頭も良いらしいですし」

「……………」

「それに、なんだかんだ言って、一緒に帰ってくれますし」

「……………」

「それに……市原君は、全体的にかっこいいと思います」

「……………は？」

一瞬頭の中がフリーズしたがすぐに回復し、間の抜けた返事をする。

俺は眉間に皺を寄せたままあかりを凝視、あかりは大真面目な顔で俺を見つめ返していた。

「かっこいい、って。そういう話してねえ……」「私は」言い終わらないうちにあかりが声を張り上げる。

「私は、市原君の顔も、市原君の体格も、中身も全っ部ひっくるめて、市原君が好きです」

“全部ひっくるめて、市原君が好きです”

「勝手なことやってんじゃねえよ」

俺の意識とは無関係に、俺の口が動き始めた。

俺は内心焦りながら、その無意識の俺に従う。

「熱もねえのに長い間医務室残らされて、いきなり長所の無さを思い知らされた挙げ句、今度は勝手に告白かよ」

ベッドの上で壁に寄りかかっていた俺は背を浮かし、あかりの細い腕を掴んで引つ張り上げた。

「ふえ！？」

あかりは驚いて手を引つ込めようとするも、俺の力には勝てずにベッドに乗り上がる。

俺はそのままあかりにまたがり、悪どい微笑を浮かべながら言う。

「はっ。こんな力ねえくせして、俺なんかと二人で布団ある部屋に残るなんて、いい度胸してんじゃねえか」

「あ……っ……」

何か言いたげなあかりだが、何も喋らせない。

上気しているようなそいつの赤い頬を、男っぱいゴツゴツした手で撫でる。

あかりの首筋から心地よい香りがしてきて、さっきの匂いはこいつのせいだったのか、と今頃理解する。

思わず目を細める。

「は、放してください…」

さすがにあかりも普通（ではないかも知れないが）の女子高生なので怖かったのか、少し震える声で俺に言ってくる。

眼鏡をしていないあかりは、やっぱり可愛かった。

三つ編みに結った艶やかな髪は俺の手荒さのせいで乱れていて、それとなく色っぽい気がしないでもない。

着崩れたセーラー服が何だか危なっかしくて、健全な男ならたまらないことだろう。

俺は例の唇に見とれ、吸い込まれるように自分のそれも重ね、そしてあかりの口内に自分の舌を潜り込ませる。

「ふっ!？」

口が塞がっていて上手く声が出せずにいるが、あかりはパニック状態の中で声を上げた。

「んんっ……んんむっ」

気持ち悪がっているのか、それともただ単に混乱しているのか、なんとなく目の焦点が上手く合っていないらしい。

あかりは尚のこと焦っていた。

「ん~~~~っ！」

一度離れ、暴れるあかりを<sup>たじな</sup>めるように呟く。

「っ、お前、うるさい」

勝手に行動する自分を抑えようとする俺がどこかにいるが、敵わない。

そんな風に引きずられたまま一番圧倒されているのは、他でもない俺なのだ。

一度唇が離れたが、何もないと虚無感がして、また勝手に動き始める。

そして。

あかりとの距離がなくなり、再び深く潜り込ませようとした瞬間。

「っ痛いっ！！！」



あかりの齒に不意に攻撃を仕掛けられたのであった。

「いつ……っ！馬鹿か、キスしてる時に本気で舌嚙む奴いるか！？少女マンガじゃあるまいし！」

「すっ、すみません、喋ってたものですから！！！」

その上その気は無かったらしい、不慮の事故。

俺はあかりを跨いだ状態のまま立ち上がり、ベッドから飛び降りて扉に近づき手を掛ける。

ある言葉を吐き捨て。

「いいか、聞けよ、ありきたり女。

俺以外の男とつるむんじゃねえ。お前は俺に目え付けたんだ、今更戻れるとかいう考え持つんじゃねえぞ！」

勢いよく扉を開け、誰も残っていないだろうこの階全体に聞こえるほどの大声で。

「俺もお前好きになるからな、それなりの覚悟しとけ！」

振り返ることもなく、逃げ出すくらいのスピードでその場を去った。

一緒に帰る予定だったらしいあかりは、やはり俺を追いかけることもなくその場に固まっていた。

……俺は、何をしているんだろうか。

### ツンレデラへの道3（後書き）

人物像がだんだん変わってきています。  
ご了承ください（^-^）  
コメント・アドバイスおねがいします。

## 京ちゃんと俺

“愛してます、市原君”

“ありがと…。俺も……お前を愛してるよ”

“ずっと、一緒にいてくださいね”

“お前こそな”

俺とあかりは赤い糸をたどり、やっとここまで来た。

もう、俺たちは迷うことはないだろう。

互いを信じ、愛し、ずっとこの先もそれは変わらない。

深い‘愛情’、その名の運命は、自分たちで切り開いてみせる。

何人にも邪魔はさせない。

あかりは俺のもの、俺はあかりのもの。

二人は離れることはない。

ずっと、守り合い続けてゆくんだ。

この先何があるかと、どんな試練が二人を待ち受けていようと。

どんな困難だって絶対乗り越えてみせる。

今、此処こゝに誓おう。

永遠の……俺たちの深海よりも深い愛は、誰にも負けることはない。

負けはしない。

今この、運命のコングを打ち鳴らそう……

「ぶへっ」

歯の浮くような譚言たんげんの数々を述べたのは俺だと勘違いしないで欲しい、京祐である。

折角格好つけてナレーションをしたが、俺の見事なアップーによって情けない終わり方をした。

「どこでそんなの覚えたんだよ、京ちゃん」

「ふっ……、ソラとアカリちゃんの様子を見てたら、ふと思いついたんでね。」

俺、もしかしちゃったら将来ライターさんになれるんじゃない？ ねえ？」

「アホ京ちゃんだね」

「何おうっ」

誰の情報だか何だか知らないが、昨日の放課後の一連は学校中で大変噂になっていた。

おかげで学校に来るのに一苦労したが（主に噂好きの女子たちのせいで）、まあなんとかやり過ごしている。

そんな俺だが、当のアカリはと言うと、実はまだ登校していない。

俺は比較的早く来る方なのでいなくても可笑しくはないのだが、そろそろ予鈴の鳴る時刻である。

「アカリちゃんが気になるご様子かな？ え？」

このっ、彼女なんか作りやがって。憎いぜこいつぶッ」

大して力を込めてないアッパーの連打。お調子者の京祐は「あはは

ー」と笑っているの、それほど痛くはないだろう。

ちなみに言っと、噂を真つ先に嗅ぎ付けた京祐にだけはちゃんと事実を告げた。

こう見えて京祐は良い性格をしてきている憎めない奴だから、多少のお気楽振りはナシとして、一応信頼している。

本音を言ってみたところ、普段何も言わない俺だからこそだろう、大いに喜んだ。

…今はふざけて冗談を言ったりしているが。

“ソラがとうとう本気で女に惚れ込んだかぁー…。よかったな！”

こいつの台詞は、さり気なく嬉しかったような気もする。

なんか、親身で考えてくれてたみたいだったし。

さておき。

俺は昨日、とんでもないことを口走った覚えがある…いや、正直忘れたいですけど。

“覚悟しとけよ！”

……………何をだよ（笑）。

思わず自分自身でツッコミを入れてやりたい衝動に駆られる。

いやマジで。

それと、あの時のあの行動。

なんで自分から好意を見せるような事をしたんだか、未だに謎である。

人類の本能というのは未恐ろしいものですね、的な思考開始。

俺は取り返しのつかない恥？をかいたような気がして、いたたまれなくなっているのだが。

「いやあ、それにしてもソラ、意外な方向に走ったね。

俺はてつきりお前のことだから、そんな状況冷たくあしらっちゃったのかと思いいながら話聞いてたんだけど。

相当アカリちゃんが好きになっちゃったんだべ？」

え？え？このこのっ

とか良いながらこの男は、さも普通のように応答してくる。



俺ってやっぱ、そういうキャラ性を持っているんだろうか。

なんか、沈着冷静？とかいう、眼鏡キャラみたいな。

…いや、ごめんなさい自分で言っただけで気分悪くなりました。

「京ちゃん。俺、なんか登校拒否したいかも」

「え！ホームシック！？I want to return my house！マミー、助けてえ！！」

……………みたいなの？」

「いや、それってホームシックじゃない？てか俺マザコンじゃないっしょ」

「ぶは」

「いやいや“ぶは”じゃなくて」

「はは。…でも、ガチで噂広まってっただけだよな。」

誰だよ、垂れ流してる奴。ソラ最近喧嘩してないだろ？」

「高校入ってからキレイに手え引いてるけどな」

俺・ソラは中学校時代、好き勝手やっている連中のうちの一人だった。

別段そういう類に憧れを抱いていたわけではなかったが、<sup>たぐい</sup>「なんとなく」入っていた。

中学2年の時。

そういう年頃な所為だろう、理性は関係なく、否応なしに周りに流される。

馬鹿なことをしているとわかっていても、周りがやっているからやる。

そんなこんなで年上の暴走族グループに属していた。

中学卒業の近づいたある日、この京祐と共に意を決してグループを抜けたのは、俺なりの正義のつもりだったのだろう。

殴ってきた人間たちへの、少しの反省、とか。

とりあえず、それっきり関わっていない。

この1、2年何も起きていなかったんだ、今更恨みを買ったことないはずだ。

「まあ、何かあったらすぐ相談しろよ、ソーちゃん」

「ちゃん付け要らない。ありがとう」

その時刻丁度に、廊下にチャイムが鳴り響いた。

机に足を乗せたまま、いつもあかりが座りに来る後ろの男子の席を見る。

『こいつ……今日欠席か？』

ふと、本鈴の鳴っているのを聞きながら、校庭を猛スピードで走っている黒い物体を見つけた。

『……………何あれ、ボディーガードさん？黒服？熊？』

いや、違う。

黒く見えるのは残像だ。

アレが俊敏しゅんびんに駆けているだけだ！

見極めろ、俺！！

……………見極めました。

……………パンが見えました。

「……………遅刻のお約束！？」

クールなキャラで通してきた俺が突然叫んだものだから、当然教室中の奴らは全員俺を見つめた。

だが俺はそんなことはどうでもよく、外の人影に視線を向け続ける。

ありがたい、例によって、調理していない生（？）の食パンをくわえた状態で走っている。

堪えきれず笑ってしまう。

「ふっ」

隣の席にいる女子が、驚いたような顔で俺を見つめていた。

## 京ちゃんと俺（後書き）

コメント・アドバイスおねがいます！

激闘してみました。

「ふっ…ふええっ…、お、遅れてすみません…」

教室の後ろの扉が開いたと思うと、時間がないにも関わらず三つ編みを結っているあかりが入ってきた。

担任の田村は「最近では遅刻しないと思っていたが、珍しいな」と一言。

かさこそと教室の隅を歩いているあかりは、噂され始めている所為か、一斉に注目を集めている。

まあ、言うまでもないと思うが一応言おう、俺も間違いなく注目を浴びている。

今までの比じゃない。あかりが来てから一段と見てくる人数も増えた。

…今更どうしようもないことだが。

俺の席とは少し離れた位置にある自席に着くと、あかりは一息つき、俺にアイコンタクトをしてきた。

“お、おはようございます、市原君”

少しはにかんだ笑顔を見せながら、そんなことを言ってるんだろうなあと予想する。

いや、多分的中だろう。

俺は、なんだかプライドも要らないような気がして、少し照れながらも

「おはよ」

持ち前のよく通る声で挨拶した。

我ながらよくやった、俺。

一瞬かなりの驚きを見せたあかりだったが、もう気にすることもないと悟ったのだろう、

「お、おはようございます」

普通に笑顔を添えて、声で返してきたのだった。

この日は（これから何日続くのかは知れないが）、本当に大変だった。

まず一番に、いつも通り連んでいる俺とあかりを盗み見る輩が増えた。<sup>やかい</sup>

それは時に、怒りと憎しみの色を見せ、時には柔らかな微笑を浮か



べて見せた。

あとは、なにやら俺たちの会話を聞こうと、盗聴器やら隠しカメラやらを持ち込む奴も出てきた。

なんとまあ、悪趣味な。

家で見ようにも聴こうにも、大した面白味も無いだろうに。

そして、文音たちだ。

文音たちは、最近になって益々ますますねちっこい嫌がらせをしているらしく、

あかりは何の抵抗もしないが、それなりに気分は害しているだろう。それとなく落ち込み気味なのはその所為だろうか。

「文音たちに何かされてんのか、お前」

「ふえ？」

放課後、清掃中のこと。

あたかも何事もないかのように振る舞おうとするあかりだが、気持ち  
が垂れ流し。

バレバレなのである。

「はは、嘘くせえー」

「な、何がですかっ」

苦笑いしながらそっぽを向いて、柔らかそうなそいつの髪をクシャ  
クシャにしてみる。

なんだ、見たまんま柔らかい髪だった。

「ちょっと、折角まとめて来てるんですけど」

「はは」

くしゃくしゃくしゃくしゃくしゃ

そんな効果音が聞こえてきそうである、俺はふざけまくってやった。

あかりの三つ編みが完璧なまでに崩れた頃、階段の下の方にいた俺  
たちのもとへ、文音たち一行が現れた。

なんだか、バトルBGMが流れそうな感じの雰囲気である。

まさに、ポケモンの。

“ ミニスカートの文音が勝負を仕掛けてきた！”

“ ミニスカートの文音の特性の『香水』で、相手のソラたちの攻撃力がぐぐんと下がった！”

防御力がぐぐんと下がった！

素早さはぐぐんと上がった！”

その場から逃げ出したいからだというのは言うまでもないことだろう。

“ 文音は、特性の『フェロモン』を醸<sup>かも</sup>し出した！”

“ しかし、相手のソラたちには効かなかった！”

うん、当たり前だけど。

色香なんて俺に効かないし、あかりは女な訳だし。

なんだか面倒臭いので、この際このままポケモンの実況をすることにしよう。

“ 文音は、『暴言』を繰り出した！「ちょっと、そこのハチ公！ツラ貸しな！」”

“アカリの『変な反抗』！「そんな変な名前、イヤです！」”

“文音の『挑発』！「ふんっ、ソラがいなきゃ駄目だって？」”

“アカリは、『負けん気』を繰り出した！「市原君は関係なく、行く気はありませんから！」”

“文音の『暴言』！「調子乗ってるね。単刀直入に言うけど、ソラはあんたのモノじゃないから！」”

“アカリは、『挑発』した！「いきなり何を言い出すかと思ったら、女性をもっと温厚にしたらどうですか？」”

“文音の『憤慨』！文音は手がつけられない状態になった！”

“文音は、『闘魂パンチ』を繰り出した！「このっ……！」”

文音の技が4つを越えてしまったので、ナレーションは元の、俺の心の語りへと戻そう。

文音から発せられたそのパンチだが、あかりに当たることはなく、俺の掌で難なく受け止められてしまった。

文音は頭に血が昇ったまま叫ぶ。

「ソラ！あんたどうしちゃったの！？」

何でこんな、変な女なんかと連んじゃってるの！？

あたしだと何が不満だって言うのよ、こんな意味深女、捨てちゃいなさいよ！」

ぱんっ

リアルにそんな音を立てて、そのまま文音は崩れ落ちた。

近くでその様子を見ていた柚木や早紀乃は、ひっ、と息を呑んだ。

「いつ……………」。

な……………、何すんだよ、ソラ！痛いじゃん！」

俺が、この手で俺が文音を引っ叩いたのだ。

それでも俺は大した罪悪感芽生えない。

むしろ、叩いてやった相手・文音の罪だと感じていた。

「何とか言いなよ、そ」「黙れ文音」

その台詞がいつもの俺と違ったのは自分でも分かった。

文音は俺以上に驚き、怯えたらしい。

少し後退していつている。

「逃げようなんて構わないけどな。謝れなんてキザなことも言わねえけど。」

ただ……俺、今さ、お前のことがっすっげーむかつくんだよな。

っていうか、虫唾むしずが走るってこういうことなのか、みたいな。

だからさ要するに。

文音には、こいつにそんなこと言える権限ないと思っただよな。

捨てちゃいなって……しかも俺までモノ扱いか。

散々だなオイ」

自分でも何が言いたいのか未だに分からない。

自分がダサく思えてきて悲しくなる。

ただ、目の前にいる文音は様子が変わってきていて。

悔しさだか悲しさだか、はたまた寂しさだか分からない涙を流している。

震えているのが手にとるように分かる。

いや、あくまでも“ように”であって。

実際に手にとって分かったらすごいけど。

いや、説明する必要ないか。

いや、ただの文章稼ぎですすみません。

なんか「いや」多いな俺。

……てな感じで、涙を流す女に弱い俺は、表情に出すのをこらえながらも心の底では動揺しまくっていた。

なんか、なんだかな。この空気。

激闘してみました。（後書き）

コメント・アドバイス欲しいです（笑）



『日想的やばい要素』を垣間見る

さあ、どうする。

今の俺はちよいと危険な状態だ。

俺の目の前には、先ほどまで泣いていた文音。

そいつが立ち上がり、あろう事が俺にペティナイフの刃先を向けているのだ。

……おい、今の女子高生の間ではペティナイフが流行ってるんですかこの野郎。

俺はまだ死ねないぞ、未練たらたらだぜ。

ってゆうか何故に俺が恨まれるんでしょうか。

俺何もしてませんよね？うん。

ああ何か近づいて来てんですがどうしようか。

とか焦っている俺に、文音はもう一度言葉を投げかけた。

「ソラ……あたしが中2の時に告ったことは、覚えてるんだよね？」

はい来ましたそついうの。

“ソラ、あたし、あんたのこと好きなの！”

覚えているといえば、覚えていないこともない。

中2の時、まだグレていた俺は、さり気なく文音の告白を受けていた。

周りの女子に比べたら、そりゃあ文音は可愛かった。

いや、ハッキリ言えば『顔が』だが。

目はパッチリしていてアイラインの必要もないくらいだし、

薄い桃色をした潤っている唇も、そそれないと言えば嘘である。

染めたにも関わらずあまり傷んでいない茶髪も、サラサラしていて綺麗だと思う。

その頃の俺は、人を外見だけで判断する、自分でも本気でそう思うくらい最低な奴だったので、

それだけで文音の告白にOKしてしまった…だったと思う。

“ だったと思う ” と言うのは、まあ、色々な紆余曲折があつて。

結局は文音から逃げ回り、付き合うこともなく卒業を迎えたのであつた。

ああ、俺ってかなり最悪な男じゃねえ？

かくして小早川高校に入学した俺だったが、文音も同じところを希望したらしく、クラスまで一緒になる羽目に。

俺は多少なり動揺した記憶があるが、中学を卒業してからは文音は追ってこなくなり、普通に接せるようになっていた。

それで俺は安心しきって今日まで過ごしてきたが……

『 あれ、俺の所為なんじゃねえ、これ 』

なんとなくやばいだろと思つてきた俺に、文音は続ける。

「 あたしね、ソラにOKもらえて、すっごい幸せだった。

ずっと傍にいてくれるんだったら、何しても良いって思えたの。

薬<sup>ヤク</sup>だって、盗みだって、人殺しだって。

ソラが望んだなら、いつだって何でもしてあげようと思えたのに。

でも……、ソラは違ったんだね。

あたしの一生分の気持ち裏切って、他の女に走ったんだもんね。

最初からどうでも良かったの……？

あたしの事なんてまるで考えてなかったの？

眼中になかったの？

じゃあ何でOKなんて答え出したのよ……。

意味わかんないじゃん。

イヤだったなら早く言ってよ。

馬鹿…

あんたなんか……そんなソラなんか、死んじゃえばいいんだよ！」

俺に向けられた刃はそのまま突き進んで来、腹の辺りを目がけているので、

俺は咄嗟に飛び退いて逃げる。

「待ちな、ソラ！逃げんの！？」

「そんなん持つてる奴を待つ馬鹿いねえだろ！」

俺は狭い階段の下を必死で逃げ回る。

ときどき、文音のナイフは壁を掠<sup>かす</sup>め、その部分は深く傷ついている。

人体であんな傷を受けたら……、たまったものじゃないだろう。

絶対に御免だ。

「ッの！！」

ナイフが俺の胸元に飛び込む。

やばいと思ったのも、つかの間。

俺は……………。

あれ、生きてる。

「……………！！」

はっとして目の前を見ると、ずっと隅にいた筈のあかりが、ロツカ  
ーにしまつてあつた筈を取り出して構えていた。

なんか男の立場ないんじゃないやねえ、俺？

………そんなこと言つてる場合じゃなさそうだ。

「長崎さん！いい加減、甘ったれるのは止めてください！」

見事にナイフを薙ぎ払つたらしいあかりは、興奮して少し息を切ら  
せている。

切羽詰まっている状況だからか、あかりの形相は凄まじい。

凄まじいというより、いつものあどけなさが消え失せていた。

凜とした顔つきで文音を見据える。

「甘ったれ……？」

文音はその単語に反応するかのように、怒りの矛先をあかりへと向けた。

「甘ったれだって！？誰の所為でソラが変わったと思ってんの！

あんたの所為なんだろ、全部！

あんたが一番消えちまえばいい存在なんじゃん！」

文音は顔に青筋のようなものを立て……いや、青筋そのものを立て、

あかりに向かって突進した。

「あんた、むかつくんだよ！」

見てられなくなった俺は立ち上がり、文音を止めに入ろうとした。

が、そんなことは全く必要ないと言わんばかりに、あかりはスッと前に出て

「やつ！」

筈の棒の部分で受け止めた。

そうだ。……これは、まさにチャンバラだ。

『リアルチャンバラごっこ』と名付けられそうな感じである。

その『短剣』を持った文音と、『ながなた長刀』を持ったあかりは対峙し、互いを睨み合っている。

「あんたこそいい加減、死ねよ！」

大きく短剣…ふざけるのはよそう、

大きくペティナイフを振りかぶった文音。

あかりは怖じ気づくこともなく、また薙ぎ払った。

文音のナイフは勢いよく飛んでいき、壁に突き刺さった。

「あつ」

遠くにあるそれを取る暇もなく、やがてあかりに押し倒される。

「なんだよ、どけよ！どけ！」

叫び、喚く文音。

いつの間にか柚木と早紀乃はいなくなっている。流石にやばいと判断し、逃げ出していったのだろう。



そんなことを頭の隅っこで考えながら、俺は信じがたい光景を……  
言葉を耳にした。

「黙れ最低女！

ソラ君は私の彼なんだから！

もう一度あんな酷いこと言ってみな、このままこの筈でみぞおち突いて、悶死させてやる！！」

『日向的やばい要素』を垣間見る（後書き）

コメント・アドバイスお願いします！

## ちょっとしたゴール

さあ、ここで問題だ。

今俺が正直焦っている理由、それは何でしょう？

其の1。

文音が突然俺にナイフを突きつけ襲ってきたこと。

其の2。

あかりが、実は武術（？）が得意であったこと。

其の3。

あかりが俺を「ソラ君」「私の彼」なんて言い出した上、急に敬語を捨てたこと。

「なんとか言ったらどうなの!!」

あかりは文音に跨ったまま怒号を飛ばしている。

もはや淑女の面影は無く、今時の女子高生の本性とやら、そのものの姿である。

俺がびびっている理由は3番だ、分かり切っているだろうが。

「う、うるさいよ！重い。どけつつつてんのが分かんないの!？」

あかりは全く重くなかった筈だが、比較的華奢はやしゃな文音には重かったらしい。

…それでもあかりの方が軽いと思うけど。

「そんな言葉が欲しいんじゃない！いいからソラ君に謝りなよ！

謝るまでは何があってもどかないから！」

なんだか今日のあかりは頑固だ。

なんだかな…かなり庇われてる感。

俺は酷く落ち着いている。なんて薄情なんだか。

「うるさいって言ってんでしょ！」

「謝りなさい！」

「おいお前ら、何騒いでる！！」

丁度その場に、音楽科・小池がやってきた。

『うわ、』

奴は来るなり、俺を一瞥して「ふん」と鼻を鳴らした。

「うぜえっ」

うっかり心の声が漏れる。

いや、別に声に出ても問題ないけど。

「うぜえくない」

ピシヤリと返されまた腹が立ったが、小池は何やらそれどころではないらしい。

何しろ、あの礼儀正しくて律儀で短所のなさそうな日向あかりが喧嘩をおっ始めているのだ。

それも、問題児として目をつけられている長崎文音に尻を乗せて。

それも、すごい形相と気迫と暴言。

こんなに男勝りで暴君（体罰はしていないらしいが）で教師とは思えない女でも、無理はないだろう。

「おい、日向！とりあえず降りろ！」

あかりは振り向くこともせず怒鳴り声のままで

「いやです！謝らせるまで絶対に降りません！」

小池の度肝を抜いた。

「いい加減観念して！」

「うつせえ！！！」

「お前達！！！」

目の前で女共が叫んでいるのを聞き耳が痛くなるが、

それよりも俺には、何故ここまでの騒ぎをつくったのがあかりなのか…というのが不思議である。

『ソラ君…か』

なんか、変な響きだ。

その後は、しばらくしてから小池が援護を呼び、あかりと文音はそれぞれ連れて行かれ、文音はまだ叱りつけられていたが、

俺はあかりを迎えに担任の田村のところへ向かっていた。

「おい」

堂々と教室の扉を開けてやると、田村と半べそのあかりがこちらを向いた。

「なんだ、市原。」

ノックするなり声掛けるなりしろ」

「失礼しまーす」

「遅い」

「失礼しますっ」

「言う速さの問題じゃない」

下らない小話は止め、俺はそっぽを向きながらあかりに言う。

「迎えに来てやったよ。」

俺寝たいから、早く帰りたいんだけど」

あかりは、しゅんとして俯く。

田村は何かを察したのか、「もう帰って良い」と言って立ち上がった。

そして教室から出ようとして、去り際に振り返った。

「そうだ、市原。」

今回の件では、日向の行動は自己防衛ということにしておく。

お前は、もう少し周りへの配慮とかに気をつけておけよ、

最低でも、女に気遣いなんてさせないようにな」

よけいなお世話だ。

田村は微笑を浮かべると、すぐに真顔に戻って出て行った。

「糞<sup>クソ</sup>田村」



あかりは苦笑いして、目元をこすって「悪い先生じゃありませんよ」と、元の敬語口調で言った。

「あ、お前、敬語」

「ふふ」

一応、俺にだってそれくらい分かってるけど。

でもなんか苛立ちますね、仕方ない。

「あの、市原君」

「あ？」

これまた、呼び方も元に戻っている。

「あの、私。さっきは出しゃばった事なんかして、ごめんなさい。

反省はしてるので。

お詫びにと言っではなんですが、可能な範囲でしたら、その……」

口ごもる。

なんなんだ、この女は。

「なんだよ、ハッキリ言って」

「え……と……」

「こういうのが無ければ、本当に良いヤツなんだが。」

「あの、ですね。」

「こないだの市原君の、告白？を、う、受け取らせて頂こうかと……」

「あかりは手をモジモジさせながら、やや俯き気味で言った。」

「何！！？」

## ちょっとしたゴール（後書き）

コメント・アドバイスお願いします。

## 距離

俺はしばらく啞然としたまま硬直し、あかりを見つめていた。

あかりは何とかそれに耐えていたが、やはり気恥ずかしくなってきたのか

「……し、……失礼します！」

逃げ出した。

「いや、待てよ」

語尾に汗マークがつきそうな声色で呼び止める俺。

自分でもよく分かっていないが、相当焦っているらしい。

「とりあえず、落ち着け。落ち着け落ち着け落ち着け」

「いついいいいいい、いい市原君が落ち着いてください」

「おっ……お前こそ声震えまくってるから」

「いいいい市原君だって焦ってますけどっ」

随分アホな事をしていると思った。

俺とあかりは深呼吸して、その場で座り込み、改めて互いをまじまじと見合う。

あかりは少し火照ったような顔をしている。

目は泳いでいて、たまに俺と視線が交わされるがすぐに逸れる。

「…あの」

口火を切ったあかりの瞳を見つめる。

「あの、それで、市原君はどう思ってるんですか」

「あ、えと」

なんで今更口ごもる。

自分で自分にツツコミを入れたくなる。

やっとここここまでこぎ着けたんだ、引き下がれない。

「……………ていうかき、最初に俺にキスしてきたのお前の方だろ？」

その後に告るって…順序おかしくねえ？」

……………だから何でそうなるんだよっ！

答える俺、質問に！

「た、確かにそうですね…」

「その上で告ったから、俺」

ほとんどの生徒が帰宅し、静まりかえった教室。

空いている窓から、柔らかい風が吹き付けてきた。

くすぐったいような、そんな気持ち良さ。

俺は何もかもを考える気がせず、本心のままにあかりに言った。

「俺もお前のこと好きだよ」

そしてそのまま、あかりの細い黒髪に触れる。

流れるように撫で付け、その手は肩に落ち、巻き付く。

あかりの肩が微かに震えた気もしたが、少し経つとおさまり、穏やかな鼓動が伝わって来た。

片腕で抱え込んでいる形になる。

それでも、小さなあかりは十分に収まっていた。

『小<sup>ち</sup>っせーの』

あかりの頭に顎<sup>あご</sup>を乗せ、今までにないくらい彼女を愛おしく思った。

『…あ、いい匂い』

女の首筋からくる独自の匂いは結構好きだ。

香水みたいな、人工っぽい甘ったるいやつとは違って。

「……市原君……」

あかりに声を掛けられて、ふと我に返った。

バツと腕を解いて彼女を放し、怪訝そうな顔つきで見やる。

「な、何か？」

「お前、それイライラする」

「ふ、ふえっ!？」

突然ガン飛ばされたからか、あかりは戸惑っている。

「お前のその俺への敬語口調と、俺の呼び方」

この女に妙に気にくわないところがあるのはその所為だ。

「俺にはタメ口でいいし、“ソラ”って呼んでくれればいいから」

「じ、じゃあ……」

これでいいかな、ソラ」

名前を呼ばれたのと同時に、弾かれるように動き出す。

それは先ほどまでの理性を持ったのとは違い、もはや本能に従っただけの行動だった。

「きゃっ」

乱暴にあかりの腕を掴んで壁に押しつけ、押し返そうとしても構わない。

「そ、ソラ……？」

キスしているわけでもなく、襲おうとしているわけでもなく。

俺はあかりの耳元で囁くように言う。

「俺に構っちゃったからには、それなりに自覚持たないかね……？」



体力使い果たしちゃっても知らないから」

そう悪戯っぽく笑ってやると、あかりはみるみるうちに赤面して、俯いた。

俺は右手でそつと後頭部をつかみ、あかりの顔を上げさせる。

あかりは察して、まだ顔は赤いけれど目を閉じた。

なんで、こんなにも愛おしく思えるのだろうか？

そんなの、俺にだって分からない。

ただ、“なんとなく”運命ってやつもあるのかと。

ほんの少し、そう、ほんの少しでもいいから、そいつを信じてみたい。

信じて信じて信じ通したら、きっと何かが見えるかも知れないから。

だから、好きになったこの女と一緒に“何か”を掴みたい…

理由なんて、そんな簡単なモノで良いと思った。

「ソラ……」

至近距離にある二人が、徐々に距離を無くしていく。

……と、その時。

扉は、勢いよく開いた。

「お前たち長崎のこと話……って…、

……何やってんだ？二人して」

ガラッと扉が開いたと思うと、キョトンとした田村が立っていた。

俺たちは互いに飛び退いて、冷や汗を垂らしていた。

『「ただけ絶妙なタイミングで入ってくんだよ！」』

これも、この『お約束ガール』の力（？）であろうか。

俺は、キスすることが出来なかった所為なのか、

それともこれから先のことが思いやられるからなのか、

どちらだか知らないが、深い深い溜息をついていたのだった。

## 距離（後書き）

コメント・アドバイス等お願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9531e/>

---

お約束days

2010年12月9日15時20分発行